



In Laboratory Now

研究室訪問 2

過ごしやすさの探究

藍沢博 研究室～建築学専攻



藍沢 博 教授

建築学科には「工」という文字が入っていない。これはこの学科が人を中心において研究をしていることの証である。

ここ藍澤研究室では、人間を中心に置いた多岐にわたる研究が行われている。そしてこれらの結果は報告の形をとって地域に還元されている。つまり研究の結果得られた考え方を提示して地域自身のやる気を促すことで、新しい地域づくりに一役買っているのだ。

今回はたくさんの分野の中から、特に地域計画と文教施設についてのお話を伺った。



住み良い地域をつくるために

地域計画とは、その地域の住民が快適に過ごせるように計画だてることだ。しかし地域という言葉の中にはオフィス街を含む都市地域や、自然に恵まれた農村地域も含まれる。そして都市と農村では求めるものが違う。よって地域計画はそれぞれの地域特性を考慮していく必要がある。

まず都市における地域計画について述べよう。住みやすい都市をつくるにはどうすればいいだろうか。一般にも言われていることだが、現在の都市の人間関係は希薄である。隣に住む人を知らない人が増加していることからこれがわかる。また様々な軋轢からストレスをためてしまっている人も多い。さらに自然が失われていっている。他にも問題点はたくさんある。これらの問題点の解決が、都市を今よりも住みやすい場所に変えていくことになる。

解決策には緑空間の利用が挙げられる。緑空間とは樹木や土のある空間のことで、公園や農地等を指す。ここでは例として市民農園の利用を挙げる。市民農園を借りた住民はそこで作物を作る。しかし農業を生業にしていない都市の住民が作物を作るのは大変な作業である。当然そこには、失

敗や試行錯誤の繰り返しに伴う。また自分で作った作物の出来不出来は気になるものだ。これらを話題にして、農地を借りた人同士のコミュニケーションが生まれる。こうして新しい人間関係がつけられていく。また土地に触れていることでの癒し効果も期待出来る。

さらに緑空間の利用例としてビオトープを挙げよう。ビオトープとは、自然を復元して作る、人間を含む様々な生き物が共生出来る環境のことだ。そもそも今自然が少なくなってきたのは昔行われた自然破壊型の計画のせいである。当時は人間にとっての都合のみを考えて、他の生物のこと等が念頭に置かれていなかった。これは環境的に弱い生物が住めない環境は人間の住む環境でもないという現在の計画と、大きく異なる。時代が変わり人間が環境に求めるものが変わったため、このような違いが生まれている。当時の計画がつくってしまった傷を現在の計画が治そうとして作られているのが、ビオトープなのだ。ここで行われていることは昔やったことの逆回しである。例えば、当時臭いを理由に埋めてしまった川がある。しかし今ではそこに人工的に小川を復活

させている。さらに、自然との共生を目指して田圃のヤゴ等を放したりもしているそうだ。こうして段々環境は理想とする自然な状態に少しでも近づこうとしている。

次に農村における地域計画について述べる。農村の抱える問題点とは何だろうか。高齢化や土地利用の荒廃が挙げられる。それではどうすればこれを解決出来るのだろうか。その一つに地域の活性化が考えられる。

地域を活性化する方法には地域資源の活用がある。ここでいう地域資源とは、その言葉を聞いて一般に人々がイメージするものとは少し異なる。例えば、地域資源の祭りと言われると、開催される当日の御神輿や屋台等をイメージしがちだ。だがここでいう地域資源とは、その土地で代々引き継がれてきた祭りのノウハウを指す。ではこの祭りを使ってどのようにして地域を活性化するのであろうか。

住民は穏やかな日常の中で、前々から華やかな祭りの準備をする。祭りの規模にもよるのだが、一年も前から準備を始めることもある。これが生き甲斐になるという人もいるだろう。また準備の中で、地域の人間や組織が関わりあい、連携が生じる。この連携は祭りに対してだけでなく、日常にまで影響を与えるようになるだろう。こうして住民の積極性が増すことで、地域が活性化するのではないかと考えられるのだ。

都市や農村等様々な地域によって具体的な計画は異なっているが根底の思想は同じである。地域の担い手となり得る人を活用すること、つまり人的資源の活用が根底にあるのだ。

この根底にある思想を「祭りへの参加」と「ピオトープによる居住環境整備」の二つを例にとって説明しよう。祭りへの参加の仕方には大きく分けて二つ考えられる。祭り当日だけで楽しむのが一つ、祭りの準備をして後かたづけまで参加をするのが一つだ。前者は責任がなく楽な立場だが、当日の楽しさしか得ることが出来ない。いわばつまみ食いである。対して後者は大変ではあるが自分の役割を遂行して、充実した楽しさを得ることが出来る。またピオトープは、作った後も維持するのが大変である。例えば、バランスが崩れると蚊が大量発生したりするからだ。毎日の手入れ等が必要とされるのだ。そのような手間をかけるよりは、環境的にはピオトープほど望ましくなくても人工的に水を流す程度にし、管理を楽にするという考え方もある。前者が充実した楽しさで、後者が充実感のない楽しさである。充実した楽しさにはやっぱりごとが付き物だ。このやっぱりごとへの地域住民同士の意見交換がその地域の活性化に繋がると考えることも出来る。

地域計画とは充実した楽しさを地域住民に提示することだ、ということも出来るだろう。

地域資源の一例

本文中で地域資源についてふれた。地域資源とは以下に挙げる例のようなものである。これは一例に過ぎないが、言葉からイメージするものとの違いを感じとってほしい。

地域資源：地形、河川、農地、林野など

生活関連施設資源：日常食料品店、学校、病院、公民館、遊び場、公園など

住環境資源：日当たり、風通し、治安、隣人とのつきあいやすさ、静かさなど

地域活動・組織資源：町会・自治会、婦人会、子供会、祭り等の行事、川・道路等の清掃活動など

地域のシンボリック資源：伝統的な民家、神社、石垣、棚田など



偏りから見えてくる

地域計画の発端である地域の問題はどのようにして見つけられているのだろうか。ここで行われているのが地域診断と呼ばれるものである。これはその地域について調べ分析して、その結果を白

地図に段階的に色づけること等でなされている。具体的にどうしているのだろうか。

まず地域について知る必要がある。ここで公開統計情報だけではわからない情報を補うために、

必要となるのがアンケートだ。これにより調べたデータだが、それぞれの地域を比較して問題点を知ろうとするならば、これらを数値化する必要が出てくる。ここで用いられる方法に、例えば主成分分析等の統計的手法がある。これは様々な変数を2つから3つの主な軸に置き換えてサンプルをプロットして分類する方法である。この方法でA市とB市の比較をしてみよう。まず横軸に農業基盤の充実、例えば土地を持っている等の条件をとる。次に縦軸に若い人が多いという条件をとる。

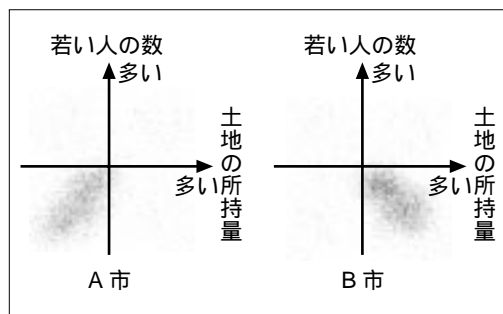


図 1

そして無作為抽出をしたサンプルをプロットしていく（図1）。図からわかるように、A市は農業基盤が小さくて若い人が少ない。B市は農業基盤が大きくて若い人が少ない。このようにしてそれぞれの市の傾向を知ることが出来る。地域診断では、こうして得られるその地域の活性度や暮らしやすさの度合いを、色分けして白地図にのせている（図2）。ここからわかる傾向から問題を持っている地域を判定し、その問題点を明らかにしていくのである。

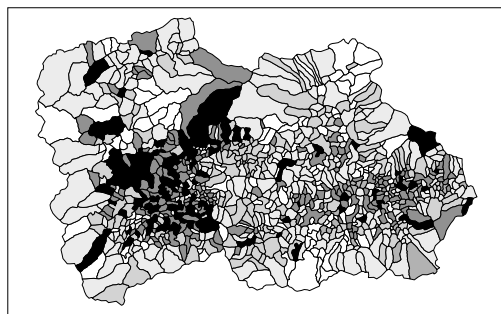


図 2



効率よりも大切なこと

「文教施設」とは、学校や図書館、生涯学習センター等を初めとして、教育や学術やスポーツや文化等人々が日常生活の中で生涯を通じて利用する施設全般を指す言葉だ。藍澤研究室ではこれについて研究をしている。主な内容は文教施設を用いた地域活性化についてだが、施設そのものの研究もされている。ここではその中でも小学校についてどのような研究がなされているのかを見てみよう。

小学校における立場には大きく分けて、校長や教頭等の学校全体の管理者、教師等の児童の監督者、そして学校の中心であるべき児童の利用者がある。それぞれの立場によって求める学校の像は違っている。利用者、つまり児童にとっては過ごしやすい場所がそれになる。また管理者や監督者にとっては、効率良く管理が出来る場所であると同時に、毎日仕事場または日常生活の場として過ごしやすい場所がそれになる。学校に求められる条件は管理しやすく過ごしやすいことだが、これ

は満たされないことも多い。その中で現在までの小学校で優先されているのは管理者の立場だ。

例えば、小学校の校庭は一般に一つである。これは児童を管理する立場からは都合が良い。しかし実際に空間を使用している児童の立場からはどうなのだろうか。低学年の児童と高学年の児童が同じ校庭の中で運動をしているとする。もし体の大きさが違うこの二人がぶつかったらどうなるだろうか。おそらく低学年の児童が大怪我をすることになる。つまり利用する立場からすると校庭は低学年用と高学年用の二つある方がいい。

また職員室の数についても考えてみよう。管理者の立場から考えると、会議が開きやすいことや校長等が教師を監督しやすいこと等から、職員室は一つにまとめた方が効率が良い。それでは利用者の立場から見るとどうなのだろうか。例えば、教師にとって職員室は仕事をする場所だ。一人当たりに広い場所が与えられる方が仕事は楽に出来るようになり、効率の良さがうかがえる。また職

員室の数が多いと、児童の近くに教師がいることになりふれあいの時間が増える。そのため児童はより細やかな指導が受けられるようになる。つまり利用者にとっては職員室の数は多い方が過ごしやすい学校になると言えそうだ。

これらの例からわかるように、現在までの小学校の多くは効率の良さを求める管理者の立場で設

計されている。しかし実際に学校で長い時間を過ごすのは、使用者である児童や教師である。建築の求める理念は「利用者の立場に立って設計をする」というものである。現在の小学校には、もっと利用者の立場に立った過ごしやすい学校づくりをすることが望まれている。



多機能を持つ学校を目指して

それでは文教施設の研究の主である、施設を用いての地域活性化についてはどのように考えられているのだろうか。これには始めに述べた地域計画の考え方が使われている。

日本の公立小中学校は極めて均等に立地している。およそ35,000ほどあるそれらの施設は、500mから4.5kmも歩けば必ず目にすることが出来る。この均等に配置された施設に、地域計画の考え方を使おうというのだ。

その方法の一つとして、藍澤研究室では現在子どもの居場所について研究が行われている。これは放課後を子どもがどこで過ごしているのかの研究である。もし塾や屋内でのテレビゲーム類ではなく地域の中に遊べる場所があるならば、そこは地域住民の一員である子どもにとって居心地の良い場所になるだろう。さらに子どもにとって過ごしやすい場所は、大人にとっての過ごしやすい場所にもなる可能性が高い。もちろん大人の知らない子どもだけの居場所があることも大切ではあるのだが、これだけでも地域の中に子どもの居場所があることは価値がある。しかしこれには他にも価値がある。それは、本来ならば関係が薄い親以外の大人と子どもとの間にふれあいが生まれることである。

子どもは、悪いことをして近所に住む大人に叱られたり老人に人生の教訓を伝えられる。かつては、このような人と人との密接な関係を至る所で目にすることが出来たという。当時はこのように

して、人と人の繋がりを通じて伝承が行われて地域資源は育っていた。しかし子どもの居場所が失われている現代に、このような関係を築いていくのは難しい。そのために様々な年代の人が互いにふれあえる場所が必要とされているのだ。

それでは子どもは地域のどこで遊べばいいのだろうか。学校を含めた、地域に共用の屋外空間を整備していくことで居場所づくりが可能ではないかと先生はおっしゃる。

ここで日本中に均等に配置されている小中学校について考えてみよう。子どもがそこで遊ぶのはいいとしても、学校に関係ある住民はそこに通う児童とその保護者だけと考えがちである。しかしそういう立場にない人にも学校施設の利用が出来るようにすれば、学校は様々な年代の人が関係しあえる場所になる。現に空き教室を用いて学校を生涯学習の場所としての公的空間、地域施設にすること等が進められており、さらに空間にこだわらない学校と地域社会との連携の方策が進められている。

従来の学校は、教育施設としての単体の機能しか認識されてこなかった。しかし所謂勉強だけではなく、次世代に地域の大切な資源を継承出来るような複数の機能を持つ場所にすることも可能はずである。

これは大きな夢だ。しかし決して実現不可能な夢ではない。

「建築とは、そこを使う人間の過ごしやすさを中心において行うものである」

これは建築という言葉に建物を建てる等といったイメージしか持てないでいた私にとって、とて

も印象深い言葉です。

最後になりましたが、度重なる取材にも快く応じて頂きありがとうございました。心から感謝いたします。
(田島 幸恵)